

25 明治時代の産業発展に貢献：レオン・デュリー

レオン・デュリー（1822-1891）は、1862年に日本に到着しました。江戸幕府が箱館に建設する予定だった病院の病院長として招へいされましたが、病院の設置計画が中止となっていたため、デュリーは、長崎のフランス領事館に勤務となり、領事として勤務する傍らで日本人にフランス語を教えました。領事館の閉館に伴い、デュリーはマダガスカルへの転勤を命じられました。しかし、デュリーは、これを拒否して、京都府が創設したフランス学校の校長兼教師になりました。



Léon DURY
レオン・デュリー

デュリーが京都で勤務していた頃、京都府知事からの依頼で、1872年に3名の西陣織の職人が、絹織物産地として有名なリヨンへ派遣されました。井上伊兵衛、佐倉常七、吉田忠七のうち、吉田は、フランスから日本へ向かっていた1873年3月20日に伊豆半島の入間沖で座礁して沈没したフランスの貨客船ニール号に乗船していたため、命を落しました。乗客乗員合わせて94名（諸説あり）のうち、命が助かったのは4名のみという悲惨な事故で、吉田は唯一の日本人犠牲者となりました。しかし、他の船で先に帰国していた井上と佐倉は、デュリーの計らいで、ジャカード織機を持ち帰りました。ジャカード織機とは、穴を開けた厚紙（パンチカード）を使った最初の機械式織機で、パンチカードを使うことで複雑な模様を早く織ることができるものでした。ジャカード織機の導入によって、西陣織の生産性は飛躍的に向上し、日本の絹織物の近代化に大きく貢献しました。

デュリーは、1877年の帰国に先立ち、新しい日本を作る優秀な人材を育成するためには、フランスで最新の知識と技術を学ぶ必要があると京都府知事に進言しました。染色、織物、機械、鉱山を始めとしてそれぞれに異なる分野を学ぶために、8名の若者が選抜されました。デュリーは、知事から任されて、学校の選定から留學生活の支援まで、留學生たちの一切の面倒を引き受けました。彼らは、休暇の際には、マルセイユ近くのランベスクにあるデュリーの生家で過ごすこともあったと言います。

デュリーの死後の1899年、彼の教え子たちが、恩師デュリーの功績を称えるために京都の寺に「レオン・デュリーの碑」を建立しました。デュリーの教え子たちは、産業界や法曹界など様々な分野で活躍して、日本の近代化に貢献しました。

掲載日：2023年4月3日